［書評］有（う）からの創造

哲学史家としての田辺元

山　本　舜

はじめに

『渦動する象徴――田辺哲学のダイナミズム』（晃洋書房、2021 年。以下「本書」あるいは『渦動』と略記）は、実質的に国内において三冊目となる田辺哲学の研究論文集である。「座談会」における田辺哲学とその研究の概説に始まり、そこに付随する諸問題の指摘、多様な観点から田辺を描き出した諸論文、資料や文献目録に至るまで、多くの価値ある研究が盛り込まれた画期的な一冊である。

筆者はたまたま本書の校正と索引作成という形で編集の末端に携わる機会に恵まれた者であるが、この度書評者として再びこの論集に接する恩恵に与った。関係者各位に対してはこの場をお借りして改めて厚く御礼申し上げたい。ただ、筆者が関心を持っている田辺の数理哲学的な問題を特に主題的に論じたものは、残念ながら本書には収録されていない[1]。そこで本稿では、収録された特定の個別論文に専門的な関心から論評を行うという方法はとらずに、田辺哲学研究という観点から本書の意義についていくらか考察を行うことで書評を行い、そこから引き出され得る問題を筆者なりに引き受け直して論じるという構成をとってみたい。

以下では、まず田辺哲学研究史上画期的と考えられる『渦動』の意義を三点指摘する。そしてこの三点を踏まえて現状の田辺哲学の研究に纏綿する問題を引き出す。最後にその問題に対して筆者なりの一つの考えを、表題の「有からの創造」と「哲学史家としての田辺元」ということに関連づけて示す。書評文の体裁としては些かはみ出すものが多く、論文としてはあまりに粗雑な内容に留まるが、以後の田辺哲

[1] デデキント切断については以下で触れられている。『渦動』pp. 84-87、146-147。

学研究に対して問いを投げかけ、それに自ら愚考を提示する試みとして、叩き台的にでも意義を解されれば幸いである。

また本稿では、編者、執筆者諸氏に対しても、学術上の形式から敬称を略した。この点については前もってご寛恕いただきたい。

1　『渦動する象徴』の田辺哲学研究史上の意義

田辺哲学を主題とする国内の論文集は、雑誌で組まれた特集号などを除けば、田辺の生前に刊行された『田辺哲学』（弘文堂、1951 年）と、死後に生誕百年を記念して編纂された『田辺元　思想と回想』（筑摩書房、1991 年）の二冊のみである。この意味で『渦動』はちょうど 30 年ぶりの論文集ということになる。まず以上の既刊の論文集と比較した際の本書の特徴を三点指摘する。

最初に言えることは、既刊の二論文集がいずれも直弟子による編纂という色彩を強く帯びているのに対して、本書がこの側面を著しく脱色しているという点である。家永三郎が 1974 年に指摘した際には、田辺哲学の研究は「門下の人々の頌徳碑的な讃辞または解説を除き、客観的ないし批判的観点に立ったものは、おおむね田辺哲学の結果の攻撃に終始している傾向がいちじるしい」状況にあった[2]。これは本書の執筆者でもある藤田正勝が『日本哲学史』においても論じているように、戦前から戦中にかけての日本哲学が時局的な問題などとの関係で長らく客観的な評価が困難な状況に晒されていたことと関係している。ここから「戦後四〇年から五〇年を経て、ようやく西田の哲学や京都学派の哲学が、同時代の人たちの思い入れや、逆にそれに対する反発から自由になり、客観的な研究の対象とされるようになった」[3]。ここで重要なのが、家永が「頌徳碑的な賛辞または解説」と評した門下の側の言説からも近代日本哲学が自由になったと藤田が述べている点である。田辺哲学もまた、1980 年代から 90 年代にかけての近代日本哲学の研究の再始動に合わせて研究の傾向に変化があった。第二の論集『田辺元　思想と回想』はその流れにあるも

[2] 家永三郎『田辺元の思想史的研究』法政大学出版局、1988 年（第二刷）、p. 324。
[3] 藤田正勝『日本哲学史』昭和堂、2018 年、pp. 376-377。

のとして見なせるが、一方でそれは直弟子との繋がりがなお強く残存した論集であった。『渦動』はそこから三十年という時間的な隔たりを経て、田辺をそうした私的な人間関係に基づく正負両面ある文脈から切り離し、一哲学者として学問的に扱うことに成功している。

二点目は、そうした仕方での田辺の取り扱いが、本書では多様な観点から成されている点に関してである。特に各部のトピックによってそれが整頓された構成になっていることも特筆すべきだろう。これについては、杉村靖彦が「はじめに」で以下のように述べている。

> 〔……〕どの論考も、それぞれの持ち場から田辺哲学の全体に向き合い、その向き合い方を反映させる形で個々の主題に取り組んでいる。そして、各部の区分を超えて、全ての論考が他の全ての論考と反響しあい、交差しあっている。[4]

田辺哲学が極めて広範な領域に及ぶ巨大な哲学であることはよく知られている。かつて滝沢克己が西田と田辺、そして高橋里美を論じる際に「縦は古代ギリシヤより現代各国に至る、横は宗教より量子物理学にわたる材料を駆使したこれらの哲学について、何事かを批判的に語ろうとは！」[5]と述べたことがあるが、田辺哲学は特に際立ってこの側面を持っていると言える。当然、この広大さはそれだけ多くの領域に拓かれており、多様な観点からの批評を惹起するものであることを意味する。しかし田辺は「行為」の哲学者としてあくまで「主体的に」理解することを主張し、自身の立場もまたそのように理解されることを望んだ哲学者であった[6]。田辺哲学

---

[4] 『渦動』p. v。

[5] 滝沢克己「西田哲学と田辺・高橋博士の哲学」『滝沢克己著作集 1 』法蔵館、1972 年、p. 338。

[6] 例えば田辺は「種の論理の意味を明にす」において、哲学と絶対的なものとの関係を論じるに際して「絶対が体系的認識において観想せられるものでなく、不断の主体的行為において絶対否定的に自覚せられることをいうのである。弁証法はあくまで現実と相関的なる行為の、不断に新なる統一の自覚である外ない」と主張している（藤田正勝編『種の論理　田辺元哲学選I』岩波文庫、2010 年、p. 362）。この主張を踏まえて「絶対媒介が種の論理として成立することこそ、弁証法の必然に属する。これを疑うのは弁証法を主体的に理解しないから

がそうした特徴を持っている以上、単に多方面の関心に則って自由に考察の対象とする際にも、可能な限りその内部に潜って検討することが求められる。言ってみれば、田辺哲学はその読者ないし論者を単に外から眺めるだけの立場に留まらせずに、彼らに対して「渦動における一動点」となることを要求するようなところがある。筆者はこの意味で杉村の以下の文言を解釈する。

> 読者はそれら〔所収の諸論文のこと――筆者注〕を読み進めるにつれて、そのつどの切り口から動き出す田辺哲学のダイナミズムに触れていくことになるだろう。そして、それらが重ね書きされる中で、田辺の思索世界の全貌が、文字通り渦を巻くようにして立ち現れてくるだろう。誰もこの渦の全体を俯瞰することはできない。だが、どの場所からでもこの渦に触れ、それに動かされて自ら動く者の動きには、この渦の無窮の動性が「微分的」〔……〕に体現される。[7]

「誰もこの渦の全体を俯瞰することはできない」。それは、この渦に飛び込むことなしに観照的に距離を持って眺めるだけでは、田辺哲学の核心であるダイナミズムを理解することはできないということではないだろうか。我々は田辺を研究する以上、〈研究する〉という「行為」を離れることはできない。その「行為」に切迫した哲学である田辺哲学を、一つの固定的な記号としてのみ解釈することは、ある意味では不当である。ある観点からある哲学者が主題的に論じられ、それがトピック別に整理されるということは、哲学研究の論文集の場合特に珍しいことでもないだろうが、そうした個別論文の各々が実は「渦動」における一動点として考えられ得るものであるということが、本書においては密かに示唆されている。この点に『渦動』の第二の意義があると筆者は考える。

三点目は、単に田辺哲学として与えられた諸テクストの解明という意義に留まらず、その可能性を指摘しつつ今日的あるいは将来的意義を見据えて展望を示唆して

である」ということが強く押し出される（同上、p. 393）。

[7] 『渦動』p. v。

いる点である。これは特に「第二回田辺座談会」の最終項目である「思想史の中での田辺哲学の可能性」において議題となっている。「はじめに」で触れられている通り、田辺哲学の奇怪なまでの難解さが作用して「種の論理」や「懺悔道」といった代名詞ですら「哲学・思想研究者たちの間で曲がりなりにも一定のイメージが共有されるような段階」[8]にまで到達していると言い難いのが、田辺哲学研究の現状である。こうした研究上の現状が強く意識されて、「田辺の議論を別の文脈に乗せたり、別の言葉で語り直すということ」[9]の必要性が本書では明確に志向されている。このような目的意識の表明も本書において特徴的だと言えるだろう。この議論の中でとりわけ注目されているのは、田辺哲学を必ずしも「田辺哲学」に即した形ではなく、言わば換骨奪胎する形で汎用的に利用し直す、という可能性である。田辺哲学の根本的な発想を彼の哲学自体のコンテクストから一度切り離し、それぞれの人が自分なりに田辺から受け取ったものを生かしていく。それが可能であるような側面が田辺哲学にはある。例えばこうした考えを座談会で提案した田口茂は、本書の第V部「田辺哲学の今日的可能性」において、超越的な価値を喪失した現代人がいかに「希望」を保つことができるかという現代における切迫した問いの一つに対して田辺哲学が示唆しているものを引き出している。このような田辺の「生かし方」を積極的に提示している点もまた本書の重要な意義だと言うことができる。

２　田辺哲学の研究に纏綿する問題

以上の三点が『渦動』の田辺哲学研究史上の意義だとすると、ここには田辺哲学研究を我々がこれからいかに進めていくべきかということを考える上で重要な鍵が含まれているはずである。本節ではこれらの意義を踏まえて、筆者なりに田辺哲学研究に纏綿する問題を引き出してみたい。

前節で確認したことではあるが、田辺哲学に付随する多くの問題が作用することで、田辺哲学研究は歴史的に多くの困難に晒されてきた。田辺哲学をいかに評価す

---

[8] 『渦動』p. ii。

[9] 『渦動』p. 55。

るかということは時局の問題と切り離すことが決して容易ではないし、またその切り離しを意図してもなお奇怪なまでの難解さが立ちはだかっている。さらには断片的に田辺のテクストを見る中で得られる印象によって、哲学的な妥当性についても疑問が拭えないまま何らかの田辺像が凝り固まってしまい、それ以上の研究が進まないということも一つの現状としてあるように思われる[10]。もちろんだからこそ一層の研究が要求されているのだが、これに反して促進がなかなか見込めないという点こそが大きな問題なのである。

こうした現状を受けて本書が提示しているのは、主に第三の意義で触れた換骨奪胎的な語り直しと、他の哲学者と並置する比較研究の二つであると考えられる。先述の田口論文やジョン・C・マラルドの論文は前者、つまり換骨奪胎の試みとして位置づけることができるだろう。それに対して、板橋勇仁、宮野真生子、廖欽彬の諸論考が示しているように、西田や九鬼、ハイデガーといった他の哲学者との比較検討を行うということも田辺の一つの生かし方として重要な役割を担っている。合田正人が『田辺元とハイデガー』において、同時代の日本の自然科学系研究者（今西錦司、湯川秀樹、朝永振一郎）や廣松渉の名前を挙げながら多くの比較研究の可能性を示唆しているように[11]、その展望は極めて広大である。筆者の浅見でも、数理哲学・科学哲学に精通した日本最初の哲学者とも呼べる田辺には広く数学者や科学者、延いては日本数学史や日本物理学史との接点が見出されるのであり[12]、また戦後の東京大学において大森荘蔵らによって担われた科学史・科学哲学研究との関係を問う可能性も大いに残されている。こうした田辺哲学の「換骨奪胎」と「比較

---

[10] 例えば現状、既に脚注 6 でも典拠とした藤田正勝編『田辺元哲学選』（2010 年、全 4 巻）が最もアクセスしやすい田辺の文献と考えられるが、この意味で新たな田辺研究者にとっては『種の論理』が着手点になりやすいと言える。その場合、『種の論理』はここで述べた時局性と難解さを共に一度に背負うことになり、結果田辺に対する不信感や限界のようなものが十分な読解を経ないまま読み手に刷り込まれ、早い段階で研究自体が滞ってしまうケースがあるように考えられる。最初期から田辺を追ってきた身として、田辺研究に『種の論理』の時期から着手することには、こうした実際上の問題も含めた多くの懸念点がある。

[11] 合田正人『田辺元とハイデガー 封印された哲学』PHP 新書、2013 年、pp. 30-32。

[12] 物理学史に関しては、例えば辻哲夫「大正初期における科学と哲学――桑木彧雄と田辺元――」（『物理学史研究』第 4 巻第 1 号、物理学史研究刊行会、1968 年）を参照。

研究」は、今後の田辺哲学研究を先導する指標として捉えておくことができる。

しかしこの「換骨奪胎」と「比較研究」という側面を加味したとき、一方で田辺哲学は、「田辺」という固有名を引き剥がしても可能な「媒介の哲学」という一つの形式的なモデルケースとしてしか、あるいは他の哲学や哲学者との干渉関係においてしか評価できないものなのか、という疑問が素朴に生じてくる。その哲学的骨子を抜き取って別の形で生かしていくとか、西田哲学やハイデガー哲学との比較に晒されることでその真価を発揮するような哲学として評価していくことに意義のあることは言うまでもないが、それのみが田辺哲学研究の進む道であると考えてよいのかは疑わしい。田辺哲学をカント哲学やヘーゲル哲学のような、必ずしも他の文脈を必要条件としないような一つの固有名的な哲学として評価することは不可能なのだろうか。

たしかに「田辺」という固有名が却ってこの哲学の拓かれた可能性を自ら閉ざしてしまうようなところがあるのは否めない。田口が座談会において「「西田やハイデガーと違って、田辺がこう言っています」では、なかなか聞いてもらえないのですよね」[13]と言及しているが、田辺元という名前にはほとんど反射的に拒絶反応を示される場合がある。

田辺の名前に付着する負の印象は、事実も先入見も含めて極めて強く作用してしまっている。これからの田辺哲学研究には、伝承や田辺のテクストから受け取ることになるこうした負の印象に対して、できるだけ田辺の側に寄り添う仕方で「なぜ田辺はそう書いたのか」を吟味し、内在的な観点と言えるものを論理的に確保して、その上で批判に向けられるような努力が求められている。十分に田辺哲学の全体像が見通されていない現段階では、なおこの内在的な観点からの理解は少ないように思われる。だからこそ、この哲学に適当な見切りをつけたり早計な判断を下すことが、今最も戒められるべきであるとも言える。

ともあれ、このような「田辺」という固有名に伴われる払拭しがたい忌避感というものを事実的に承認する場合には、田口のように「後出しで田辺を出す」[14]、あ

---

[13] 『渦動』p. 58。

[14] 同上。

るいはもうそこに田辺の名前を出さないということは、一つの対応策にはなり得る。実際田辺の「媒介の哲学」は一本の論理の糸とも言うべきものの徹底によって構築されているところがあり、その意味でこの哲学においては田辺の私的な経験や個別具体的な内容を研究上捨象してしまっても大きな問題が生じないような側面がある。これは、初期において「心理主義」における経験的なものへの還元措置に徹底的に批判を加え、「論理主義」の哲学をとった田辺の立場を踏まえれば、ある意味では当然である[15]。この観点からすれば、「田辺」という固有名を取り去ってその哲学的骨組みを再利用することは、田辺哲学においては決して不可能ではない。だがそれは同時にもう田辺哲学と呼ばなくてもよいのではという考えを誘発してしまう。

「比較研究」と「換骨奪胎」――西田やハイデガーの参照項、あるいは哲学的骨組みの再利用という研究指針は、なお「田辺哲学」という固有名の哲学の評価を考える上では消極的であることを免れない。もちろん、最早田辺哲学という哲学的建築物の名称には拘らない方がよい、いっそそれを破壊してしまえばよい、という考えもあるかもしれない。だが筆者は一方で、「哲学者の「人」を離れない」[16]という観点も重視すべきではないかと考える。それは決して心理主義・経験主義的に哲学者の私生活や個人的傾向性によってその哲学の「論理」を推し量ろうという意図ではなく、哲学者が思索の成果として打ち出した一つの総体をそれを生み出した「人」から絶縁することは、その具体的成立基盤を離れるという意味での論理の抽象化に堕してしまい、田辺が追い求めていた「具体的論理」をまた一面で離れていくところがあるのではないか、という危惧による。

筆者には、カント哲学やヘーゲル哲学のように語られるようになった西田哲学と同様に、田辺哲学が固有名的に積極的に認識されることがなければ、田辺哲学研究は依然として現状の滞りを解消することができないように思われる。田辺元という人の、研究に対する極めて実直な態度、並一通りではない探究精神、そこから明晰

---

[15] 田辺自身による心理主義と論理主義の問題についての簡潔な論述として、「認識論と現象学」(1925 年)の「二　認識論に於ける経験心理主義と先験論理主義」が参考になる（『田辺元全集』第 4 巻、筑摩書房、1963 年、所収）。

[16] 杉本耕一『西田哲学と歴史的世界――宗教の問いへ』京都大学学術出版会、2013 年、p. 330。

透徹な論展開を構築する技量には尊敬すべき一面――実際そこへの尊敬を抜きにして、田辺の業績や精神を内在的に批判することはおろか、適切に理解・評価することすらできないだろう――がある。そうした面をも内含した「人」である田辺を離れない「田辺哲学」という一つの像を提示していくことは、「比較研究」や「換骨奪胎」と併せて目指されるべき一つの指針ではないか。

あるいは、そうした一つの像の提示自体が、前節の第二の意義で論じた「誰もこの渦の全体を俯瞰することはできない」という田辺哲学のダイナミズムの問題に抵触する見方とも考えられるかもしれない。しかしこの場合の「田辺哲学」という一つの像の提示は、決して田辺に対する鳥瞰的、観想的な観察・把握に留まるものではないはずである。むしろそれ自体が「渦動における一動点」として、田辺という人を基軸に田辺哲学全体を微分的に反映・体現していく行為であり得る。それどころか、そういった観点が反映されていないような一動点は、全体を体現する点としては不十分であると言わざるを得ない。我々は可能な限り充実した「田辺哲学」の全体を――普遍的な像として固定化し、そこに安住してしまうのとは別の仕方で――究明し、刷新を心がけていくべきである。そのためには、田辺元という人を離れないで「田辺哲学」を考察することも重要な契機として勘定に入れておかなければならない。

最後に本稿では、まったく微力ながら、「哲学史家」としての田辺元の可能性を示唆する仕方で、その可能性の一つを提示してみたい。

３　哲学史家としての田辺の可能性

田辺哲学から「田辺」という固有名を取り去ることなく、その独特な哲学を評価するために一つ考えられるのが、「哲学史家」として田辺を評価するという観点である。もちろん田辺以前にも例えば『近世に於ける「我」の自覚史』(1916 年)の執筆者である朝永三十郎や、ケーベル直伝の文献学的態度に基づいて研究を行い、田中美知太郎をしてただ一人「本当の理解をもって、ヨーロッパ思想の正統に立たれ

ている」[17]と言わしめた波多野精一がいたため、田辺を日本哲学史上先駆的な哲学史家のようにみなすことはできない。だが田辺が叙述のところどころで提示する膨大な数の哲学者と、その理解の強度および蓄積は、確実に彼が文献学的基礎研究を着実に遂行してきたタイプの哲学史家であることを物語っている。そして学生の頃より誠実に練り上げられていった彼の個別研究は、決して散り散りにではなく、かと言って個別的意義を損なうこともなく、哲学ないし哲学史というもののなんらかの意味で統一的な全体理解にまで到達しているように思われる。

ただ、田辺本人はそうした文献学的な作業によって所謂哲学史を描くことを目指していたわけではない。彼はむしろそうした哲学史を自分の哲学とすることには批判的であった。特に後期の『哲学の根本問題』(1949 年)において田辺は、哲学史研究の必要性を踏まえた上で、次のように述べている。

> しかし、今日、最後に申したいことは、哲学史は自身が哲学するときの、哲学的探究の手引であって、哲学史が自身の哲学の代りにはならないということであります。〔……〕日本の哲学をやる多くの人たちが、すぐれた能力をもっているにもかかわらず、哲学史に停滞して、哲学の歴史的解釈で能事終れりとし、今日このところにおいて、われわれ自身ののっぴきならぬ自己の問題というものを、回避する傾向があると思うからです。[18]

哲学史研究を自らの哲学に代えることはできない。こうした態度からみれば、田辺を「哲学史家」と見ることは全く適切ではないだろう。しかし彼の場合、一方で過去の哲学が残したものを全く度外視して新たなものを創り出すということもまた承認できないことであった。むしろ哲学というものは過去の哲学の理解の上に成立し、その歴史的相対性を絶対的自覚の立場から自覚することで体系となるものとして理解されていた。その意味では、田辺は「哲学史即哲学」という立場をとってい

---

[17] 田中美知太郎「ひとつの私的回想――波多野精一先生と古典研究」『田中美知太郎全集』第 13 巻、筑摩書房、1987 年、p. 363。

[18] 藤田正勝編『哲学の根本問題・数理の歴史主義展開　田辺元哲学選III』岩波文庫、2010 年、p. 108。

たのである。このことは『哲学通論』(1933 年)における彼の哲学史理解に明確に現れている。

> 過去の哲学史を了解し、それを自己に負はされたる伝統として体験しながら、同時に自己の現在の歴史的社会的位置が課する所の実践を媒介として、此過去（伝統）と未来（実践）との相対立する相対を止揚した現在の絶対反省が哲学を成立せしめるのである。〔……〕哲学史即哲学といふのは此謂である。これは唯過去の哲学の歴史を文献学的に探求し史料を解釈して、時代の文化との聯関に於て叙述した哲学史が直ちに哲学であつて、此外に哲学無しといふ意味ではない。[19]

つまり田辺にとって哲学史とは、（1）哲学に代わることはできないが、（2）哲学が成立するために必要な「自己に負はされたる伝統」として尊重すべきものだったのである。

しかもこれにおいては過去の哲学は、単に現在の哲学体系のための媒介として止揚される材料の意義に回収されるわけではない。田辺はその側面とともに「体系としては現在の哲学と関係なしに其自身完結したものなること」[20]を承認する必要性を説いている。つまり過去の哲学は単なる現在の哲学のための膳立てのような役割に過ぎないのではなく、それ自体として完結性や独立性が認められるものとして考えられているのである。そこにカント哲学やヘーゲル哲学といった個々の哲学の哲学史上の独立性が確保されている。この点に、田辺の「哲学史家」としての矜持を認めることができる。

過去の哲学の陳列に留まることを潔しとせず、さりとて過去の哲学を自身の論理にただ飲み込んでいってその個性や独立性を奪うこともせず、哲学史と哲学を同時に生かすような哲学を田辺は考案していた。従って田辺の行なった他の哲学の個別研究は、単に田辺哲学の形成上利用された素材という扱いに留まっていない。むし

---

[19] 『田辺元全集』第 3 巻、筑摩書房、1963 年、pp. 425-426。
[20] 同上、p. 427。

ろそこには個別研究の観点からもある程度信頼に足る、あるいは参考にすべき分析や考察が多く存する。もちろん哲学史の忠実な再現という欲求を超えて自ら哲学することを志した哲学者には避けられない屈折した理解も、それを専門とする人の目からすれば見出されるかもしれない。だが仮にそうした理解が問題になるにせよ、それはすでに田辺の個別研究の水準を今日の専門的見地から検討するという意味で、当該研究の田辺的解釈として資するばかりでなく、同時に田辺哲学研究の一翼を立派に担うものになる。こうした意味で「哲学史家」としての田辺が問われることは、田辺研究の発展を見越す上でも、個別研究の発展を見越す上でも、むしろ悦ばしいことと言うべきだろう。

いずれにせよ、「哲学史家」としての田辺を検討することにはまだ多くの可能性がある。「二〇世紀最大の――そして、おそらくは最後の「アンシクロペディスト」（百科全書的知識人）と称するにふさわしい知的巨人」[21]と称されるエルンスト・カッシーラーと同様のスケールで田辺を評価し直すことも、おそらく的外れな課題ではない[22]。カッシーラーの労作『認識問題』は「近世哲学史概説として読むことが可能」であり、「一気に各哲学者の心臓部に行きつくことができる」[23]と評されたことがあるが、特に種の論理形成以前の田辺の個々の論文や著作はよく整理されて行き届いた概説も多い。そればかりでなく、隔靴掻痒で理解の到達し難い哲学の疑問点に臆することなく批判的な解明を試みた例も豊富である。これらは二〇世紀初頭の水準下で同時代あるいはそれ以前の哲学者たちの考えを批判的に検討した貴重な証言であり、とりわけ日本語を母国語とする哲学研究者にとって、そこから学ぶべき先哲の遺産としての価値を大いに持ったものである。それはまた西洋哲学を

---

[21] 馬原潤二『エルンスト・カッシーラーの哲学と政治』風行社、2011 年、p. 3。

[22] 実際マールブルク学派コーヘン、ナトルプの影響を強く受けつつ、同時代の数学基礎論の傾向を広く見渡しながらカント哲学の意義を捉え直し、共に「象徴」を一つのキーワードとしながら社会的・歴史的な問題に自身の哲学を拡張していった彼らの間には、多くの共通点が存在する。田辺は初期の時点でカッシーラーの著作に触れており、その意味でカッシーラーと並ぶというよりは彼を経由した側の人間だとも言い得るが、それは追従の類ではない。あくまで田辺はカッシーラーとは独立の思索人として考えられるべきである。

[23] 福谷茂「書海按針――学部学生のための読書ガイド」『Prolegomena：西洋近世哲学史研究室紀要』京都大学文学研究科西洋近世哲学史研究室、2019 年、p. 10。

広く体得した「哲学史家」田辺の、東洋の哲学者としての生き方、振る舞いを同時に我々に示すものでもある。「哲学史家」としての彼に注目することで、我々は田辺哲学の実質的な内容だけでなく、それを構築するために奮闘した――哲学研究者なら誰でもこの構築に奮闘し、苦悩するだろう――一人の人間としての魅力にも触れることができるのである。

おわりに

以上、過去の哲学を引き受け、それを語りなおし、改変し、創造するという仕方で哲学を切り開いていった田辺の「哲学史家」としての側面を確認した。こうした田辺の哲学史即哲学という営みは、伝統的過去という有（う）をそれとして保存しつつ、しかし単に陳列するのではなしに未来に新たな哲学を形成していくための媒体として扱うという意味で、「有からの創造」と称することができる。それは最も根本的なところから語ろうとする結果、一種の「無からの創造」を説いた西田とはある意味では対照的である。与えられたテクストとしての所与の本質を的確に見抜いて整理し、そこから独創的なものを生み出す。田辺のこうした「有からの創造」は極めて卓越したものであったと考えられる。

我々にとっては田辺哲学もまた「過去の哲学」である。その意味でカント哲学や西田哲学のように一つの有として、現在に対して緊張関係を持って迫ってくるものであり得る。彼らの残したテクストという有に準拠して哲学研究を行う限り、我々もまた例外なく「有からの創造」を担っている。我々がそうした有とどう向き合うかについてはもちろん様々な可能性があるわけだが、筆者はあくまで田辺に準じて、「田辺哲学」という固有名の哲学――あるいは一種の「有」――をそれとして可能な限り正確に保存しつつ、さらに批判的に引き受けて独創的なものを生み出していく意義を、ここでは主張しておきたい。このことは必ずしも田辺に追従することを意味しない。この向き合い方には、田辺個人の立場に留まらない一般的な意義があると考えてよいはずである。そしてこの意義に仮に準拠することが認められるならば、これからの田辺哲学研究にとって、「田辺哲学」という固有名の哲学をそれ自

体として理解し、保存していくことの意義も同時に承認されるだろう。一見それが保守的で内向きな研究態度であるように見えても、とにかく誤解の多いこの哲学を言われのない無理解な批判から守るためには、むしろ最も堅実で必要な向き合い方ではないだろうか。

渦は強大な力を持っている。いたずらに飛び込めば弾かれるか、ただ飲み込まれて終わることになる。かといって安全な岸からそれを眺めているだけでは、決してその力や実情を知ることはできない。そこには静かに、深く立ち入らなければならないはずである。冷静さをもってそのダイナミズムを体感することで、ただ危うく見えるだけのものに隠された魅力も立ち現れてくるのではないだろうか。今回の『渦動』はそうした魅力を後進に示しつつ、その渦の実情を個々の論点において反映したものだと言うことができる。我々はそれらに触れることで、単なる表面的な田辺哲学を超えてそれを理解し、そこから新たに動くことを迫られている。

（やまもと　しゅん
京都大学　博士後期課程）